北米児童文学のパターン転覆
―― ヒロミ・ゴトーの『可能性の水』――

岸　野　英　美

はじめに

現代日系カナダ人作家ヒロミ・ゴトー（1966-）の初の児童文学作品である『可能性の水』（*The Water of Possibility,* 2001）は、それまでに出版された『コーラス・オブ・マッシュルーム』（*Chorus of Mushrooms,* 1994）や『カッパ・チャイルド』（*The Kappa Child,* 2001）と比較して、現在までのところ先行研究での扱いは少ないが[1)]、カナダの児童向けの推薦図書に選定された秀作である。

カナダの児童文学について、白井澄子は、1980年から2000年を「カナダの児童文学の広がりと深まり」の時期であるとする[2)]。歴史的にみて、カナダは、18世紀半ばに起こったフレンチ・インディアン戦争後、事実上、イギリス系住民の権力が増大したが、イギリス系住民とフランス系住民、そしてカナダ先住民との衝突を回避し、互いの文化の多様性を認め合う努力をしてきた。そして、1970年代のカナダ移民法改正後、ヨーロッパ以外の地域からの移民が増え、カナダ国内の人種・民族集団間のさらなる相互理解を促進する必要性が生じた。1980年代に入り、文化主義政策に対するカナダ政府の取り組みは、アジア系、アフリカ系、南米系といったエスニック・マイノリティの多文化主義実現を目指すものとなり、1988年には多文化主義法が誕生する。これに伴い1980年頃にはカナダの児童文学も徐々に人種・民族的に多様となり、エスニック・マイノリティ作家の作品も注目されるようになったと考えられる。しかし、主流である白人系作家による児童文学作品と比べれば、支流のエスニック・マイノリティ作家の作品は、カナダの先住民作家の作品を除いて、まだ十分に評価されているとは言えない。例えば、カナダ文学界の最高峰とも言えるカナダ総督文学賞（Governor General's Literary Awards）の児童文学部門において、1996年に中国系作家ポール・イー（Paul Yee）が最優秀賞を受賞した[3)]。非白人であり、移民系でもある作家がこの賞を獲得するのは初めてのことである。

この流れを変えるために、カナダの児童文学作家ジャネット・ラン（Janet Lunn）[4)] はコトー・ブックス社（Coteau Books）[5)] から子ども向け図書シリーズ『同じボートで』（*In the Same Boat*）を出版する指揮を執った。『可能性の水』は、そのうちの１冊であり、ランの序文から始まる（ⅰ-ⅱ）。実際、本書以外に、同シリーズとしてスペイン系カナダ人作家ダイアナ・ヴァスケス（Diana Vazquez）の『シエラで迷って』（*Lost in Sierra,* 2001）、カナダ先住民（オジブア族）作家ルビー・スリッパジャック（Ruby Slipperjack）の『小さな声』（*Little*

Voice, 2001)、アフリカ系カナダ人作家シェリル・フォッゴ（Cheryl Foggo）の『私は危険に晒されている』（*I Have Been in Danger,* 2002)、東欧ユダヤ系カナダ人シェリー・ポーゼソースキー（Sherie Posesorski）の『逃亡計画』（*Escape Plans,* 2002）が加わっており、本シリーズが、以上のようなカナダの児童文学の現状を背景にして、カナダの人種的多様性と多文化的豊穣さを示すための児童文学シリーズとして企画されたものであるということは明確であろう。また編集に携わったランは、『可能性の水』の序文冒頭で「『なぜ私たちについての物語がないのか』という疑問はカナダの子どもたちの心からの叫びである（“Why aren't there are any stories about us?” has been a heartfelt cry of Canadian children）」(i) と述べている。本シリーズには、カナダの多文化主義政策によって、表向きは文化的多様性が肯定されつつも、実際には、アジア系やアフリカ系、南米系といったエスニック・マイノリティが急激に増加しているにもかかわらず、英系、仏系住民が事実上、優位に立つという構図が浮き彫りとなっている社会的背景もある。ゆえに多文化主義の観点からは、決して成功しているとは言えないカナダ社会の現実に未来ある子どもたちがどう立ち向かっていくべきかという各作家のメッセージも込められていることがうかがわれる。

『可能性の水』は、主人公が異界へ赴き、そこで数々の難題を解決し成長して家へ帰るという典型的なおとぎ話によくみられるパターンの一つに沿っている。そもそも、おとぎ話や童話など様々なジャンルを持つ児童文学には、どのような力や可能性があるのだろうか。社会文化史的な観点から児童文学を分析するジャック・ザイプス（Jack Zipes）は、以下のように語る。

> 実際、読者がおとぎ話を読む前に、作者の中ではすでに世界の完全な反転が生じ、作品の作者はこの不気味な経験を追体験するようかのように読者を誘う。読む過程は、読者をそれぞれ慣れ親しんだ環境から引き離し、馴染みのある環境から離れていく主人公と一体化させる。そこで本当の故郷探しが始まる。おとぎ話は故郷を求める二つの郷愁に火をつける。一つ目の郷愁は読者の心の中に生じる。それは心理的なもので、第三者が解釈することは困難である。何故なら、その解釈は読者の育ちや経験で異なるからだ。二つ目の郷愁は、おとぎ話そのものの中で生じる。それは、主人公がこれまでより強力な決定権をもつ社会に参加するための社会化過程と、社会的価値の獲得を示唆する。（ザイプス 284-85）

ザイプスは、おとぎ話を手に取る読者、特に子どもたちは、馴染みのない非現実的な世界へ引き寄せられ、主人公とともに故郷探しに出かけるという。この故郷探しは、読者自身が帰属する場所であり、居場所でもある。それは同時に自身のアイデンティティを探求するものとも言えるだろう。おとぎ話の世界へやってきた子どもたちは、次第にノスタルジックな気分に浸るが、それはそれぞれの子どもの経験や生活環境から生じるものと、物語の主人公によって引き起こされるものとある。主人公はその作家が属する社会への問題意識や態度を反映させてい

るのである。その主人公に子どもたちが共感することによって、読者である子どもたちは、彼らが近い将来直面するであろう数々の困難に立ち向かう力を身に付けていくのである。

ではゴトーの『可能性の水』にはどのような馴染みのない非現実的世界が描かれ、そこに作者ゴトーが関心を持つどのような社会問題が反映されているのだろうか。本稿ではライマン・フランク・ボーム（Lyman Frank Baum）が1900年に出版し、その後、映画化もされた北米を代表する児童向けのファンタジー文学で、日本語版では通称『オズの魔法使い』と呼ばれる『オズの素晴らしい魔法使い』（*The Wonderful Wizard of Oz*, 1900）との比較を織り交ぜる。なぜなら、本作品において、異界の空間「リビング・アース」に辿り着いた際、主人公のサユリは異界の入り口である森で「ひょっとすると『オズの魔法使い』で西の魔女が持っていた巨大な砂時計があるかもしれないわね（Maybe there might be a giant hourglass like Wicked Witch in *The Wizard of Oz*?）」（77）と想像する場面から、作者のゴトーが映画『オズの魔法使い』、あるいは原作『オズの素晴らしい魔法使い』を意識していることは明白だからである。

カンザス歴史学会（Kansas Historical Society）によると、『オズの素晴らしい魔法使い』は1956年までに300万冊を越えるヒット作となり、翻訳も多数出版されたという。実写映画の成功による影響もあり、今でもそれは不動の人気を誇り、世界中で愛読され続けている。またアメリカで生まれ、それを象徴する一冊とも言えるこの作品はアメリカの実在する地名やアメリカ的北米的要素が散りばめられている。ゴトーの『可能性の水』もまた10代前半の少女の異界における新たな出会いと衝突、数々の冒険を通して成長し、元の家へと戻る物語であり、『オズの素晴らしい魔法使い』の主人公ドロシーや、物語構図、人物設定に類似している点が多いと言える。ゆえに、これらを比較することで、ゴトーがいかに北米の伝統的な子ども向け作品のパターンを覆しているかが浮き彫りとなる。本稿では、以上の二作品の比較を通して、『可能性の水』における現実と非現実の世界の境界付近に位置づけられる森や、現実の世界に存在し得ないヤマンバや生き物たちに注目しながら、日系カナダ人少女サユリの成長過程とゴトーの文学的戦略を探り、『可能性の水』で提示されるオルタナティヴな世界観を考察していく。

1　主人公の設定

『可能性の水』において、12歳の主人公のサユリとその家族はカナダ西部の大都市バンクーバーから田舎町グラノーラへ引っ越し、古い家で新しい生活を始める。ある時、両親が不在の中、サユリと弟ケイジはお腹をすかせて食べ物を取りに地下室の食物貯蔵庫（The Root Cellar）へと向かう（61）。暗闇を進み、気付くとそこはもはや家の地下室ではなく、なぜか森の中にいることに二人は気づく（64）。のちにここは異界の空間のリビング・アースと判明するのだが、この空間が地下に存在する点と、本作品における地下の意味付けを考えたい。

周知の通り、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze）とピエール＝フェリックス・ガタリ（Pierre-Félix Guattari）が議論した多様体ないし多様性の原理としての地下に広がるリゾーム（根茎）のような型のシステムは、従来の西洋思想に多く見られた二項対立構図の強調と階層構造、または主流文化を幹、支流あるいは亜流文化を枝とするツリー（樹木）型のシステムに抗する概念とされる。リゾームは根や側根から区別され、地下において横断的に錯綜しながら他と結びつく（ドゥルーズとガタリ 上巻22）。『可能性の水』におけるリビング・アースの世界は、地下に拡がるリゾームの一部を彷彿とさせ、多様な文化や価値観を肯定するゴトーの立場が反映されているとも考えられる。

さらに異界へやって来たサユリが「この世に魔法の場所があるなんて。生命線の中の力。死と生、夢と神話の間の力（“There are magic Places on this earth. There are powers in the lines of life. Between death and life, dreams and myth.”）」（79）と語るように、地下に存在する異界は死へと繋がるものであり、生と死、現実と非現実が入り交じり、何か不思議な力が存在する場所として描かれている。

この森で二人は最初にヤマンバに出会い、ヤマンバの力を借りて現実の世界へ戻ろうとするが、ケイジが突然、行方不明となってしまう。ここからサユリの弟探しの旅が始まる。ケイジを探しに出かけたサユリは様々な生き物に出会う。まず、サユリの言うことを繰り返すだけで、自分の名前すら言えないカッパが登場する（93）。サユリはこのカッパを英語で「繰り返す」という意味をもつ「エコー（echo）」と名付け、旅を共にする。次にエコーといるところへキツネの「マチガイ（Machigai）」と出くわす（105）。マチガイの手は人間の手である。「間違いの大叔父（Great Uncle Mischief）」（105）、あるいは「キツネの長老（the Old Fox Patriarch）」（105）と呼ばれるマチガイの大叔父によって魔法をかけられたためである。このマチガイの大叔父であるキツネの長老は魔法の力を蓄え、リビング・アースを支配しようと目論んでいる（105）。以上のように、少女が次々と旅の仲間を従えながら、大事なものを探しあて、最後に家に戻ることを目指すというプロットは、『オズの素晴らしい魔法使い』にも描かれている。

ザイプスが「グリムやアンデルセンの物語にみられる古典的おとぎ話のパターンやモチーフを『アメリカ化』した」（ザイプス 203）作品と捉えている『オズの素晴らしい魔法使い』は、カンザスに住む少女ドロシーが大きな竜巻によって家ごとオズの魔法の国へ飛ばされてしまい、そこで出会った脳みそが無いカカシ、心を持たないブリキの木こり、弱虫のライオンとともに、南北の魔女の助言を受けて、悪い西の魔女を倒し、カンザスの家に帰るまでの道のりを描いた物語である。『可能性の水』において、サユリとエコーとマチガイは『オズの素晴らしい魔法使い』の主人公であるドロシーと、旅を共にするカカシやブリキ、ライオンを彷彿とさ

せ、サユリを見守る森の番人ヤマンバや道中出会う不思議な力を持つタヌキの母は、ドロシーに助言を与える南北の魔女に、そしてキツネの叔父は西の魔女にそれぞれ準えられていると考えることもできるだろう。

しかしながら、ドロシーとサユリという二人の主人公を取り巻く環境は大きく異なっている。まず、家庭環境について言えば、ドロシーは孤児であり、養父母とカンザスで暮らしているという設定であるが、サユリの家族は、都会から田舎で引っ越してきた父母、弟を持つ理想的な家族構成となっている。ドロシーの生きる現実の世界は灰色で、カンザスの農場の風景や働き者であるが陰気な養父母までもが灰色で色がない。これは19世紀末のアメリカ中西部の開拓移民の苦労や苦悩に加え、明るく振舞いながらも、孤独や寂しさを感じずにはいられないドロシーの内面も表しているようだ。

一方で、サユリたちが新居を構える人口僅か5032人のグラノーラの街には、小さなレストランや、車とトラクターのディーラーショップ、いくつかのキリスト教会、野球場が建ち並ぶ（3）。特に教会と野球場について、サユリは「グラノーラの住民がほとんどの時間を祈りと野球に費やしているに違いない（People in Granola ... must spend most of their time praying or playing ball）」（3）と断言する。キリスト教会は、元を辿ればヨーロッパやアメリカからカナダに入って来たものと考えられるし、野球、すなわち「ベールボール（baseball）」は18世紀末にアメリカ東部で初めて登場した言葉であり、いまや現代野球として世界で人気のある球技となっていることは周知の事実である。以上から、サユリの目に映る街の風景はこのように典型的で排他的な白人色が強く、カナダの多くの地でも目にする風景なのだ。また、家族が新居として暮らす古い家は、長い間、人が暮らさなかったのか、周囲は草や木が生い茂り（4）、家の中は乱雑で埃まみれである（9）。バンクーバーからやって来たサユリは少々不安を抱くが、病弱な弟ケイジと些細な喧嘩をしつつ、弟、両親ともにその関係性は良好である。とはいえ、日系カナダ人であるサユリは、この引っ越し先のグラノーラで人種差別的な扱いを受けることとなる。ある時、水泳が得意だったサユリを、母キミはグラノーラのスイミング・クラブに連れて行く。母が帰った後、以下のようにサユリはクラブで同年代のメンバーに自己紹介をする。

> “Hi,” Sayuri managed. She didn’t think of herself as shy, but this being a “new kid” was simply awful.
>
> “Sah yee eee?” Sidney wrinkled her nose. Her voice was a hiss of scorn. Like she was talking through a mouthful of razor blades. “What kind of name is that?”
>
> Sayuri’s face burned painfully. A dry rock in her throat. Kick butt, she thought.
>
> “I beg your pardon,” Sayuri said icily. “Your accent is atrocious. It’s Sa-yu-ri. Equal emphasis on all syllables. Roll the r.” (49)

サユリがプールで初めて知り合ったヨーロッパ系の少女シドニーのサユリを馬鹿にするような態度は、サユリへの人種的偏見から生じたものと思われる。それを感じ取ったサユリは一瞬顔が真っ赤になり、悔しさや恥ずかしさを表すが、シンディーの態度に動じることなく冷静に対応しようとする。このようにこの場面では『オズの素晴らしい魔法使い』のドロシーとは異なり、サユリは比較的恵まれた家庭で育つが、人種的な問題に直面することを避けられず、その差異を感じずに生きることは難しいというエスニック・マイノリティの抱える問題が浮き彫りになる。さらに、以上のように人種的な差別とも思われる言動にも屈しないサユリには、エスニック・マイノリティの精神的な強さが内在しているとも言える。

一方、二つの作品において、ドロシーとサユリの旅の最大の目的が、無事に家に帰るという点は共通している。しかし『オズの魔法使い』は、ドロシーの旅の行き先もその方角も、道中でドロシーが直面する生や死についても比較的、明確に描かれているのに対して[6)]、『可能性の水』では、サユリがまず弟を探し、その後、最初に出会ったヤマンバの家に引き返すであろうという目的は読み取れるものの、サユリの旅には、サユリが進むべき具体的な方向や行先が明確に示されてはいない。サユリは仲間との出会いや数々の試練を克服しながらケイジの居場所の手掛かりを掴み、徐々にケイジに近づいていくのだ。他方、『可能性の水』において登場人物が失踪したり、何ものかに捕らえられたりすることはあっても、『オズの素晴らしい魔法使い』で見られるような死や殺害に関する場面は一切ないという点も大きな違いであろう。このような『可能性の水』における曖昧性は、以下のティナ・ノースラップ（Tina Northrup）によるインタビューにもあるように、ゴトーが古典的なヒーロー像や物語のパターンを脱構築しようとしたためだと考えられる。

> My desire is to write stories that are diverse on multiple platforms. So, of course, diversity in terms of identity-based constructs, but I'm also thinking not only about what we story, but how we story. One of the things that has bothered me about a lot of children's and youth literature is the rather doggedly fixed depictions of "good" and "evil" as simple binaries. I think this tendency arises from Christianity and the history of morality-based literature written for the edumacation of young minds... . But, in fact, "good" and "evil" are not distinctly experienced; the human condition (youthful and adult) is complex and muddy. So I've written stories that don't replicate that "classic heroic" model. ... (Northrup)

ゴトーは、従来の特に北米における子ども向け作品にみられる善悪の二元論を、キリスト教や西洋の伝統の影響を受けて生じたものと捉え、これを疑問視し、善悪、あるいは人間の未熟さや曖昧性に目を向ける。このゴトーの姿勢が『可能性の水』における、目的地の不確かさや、善と悪の揺らぎにも繋がっていくと言える。

2　森とヤマンバの象徴性

次に、二つの作品においてそれぞれの主人公が訪れる異世界、オズの国とリビング・アースに注目したい。『オズの魔法使い』の中でドロシーは、偶然カンザスの平原を襲った竜巻によって吹き飛ばされ、オズの国へとやって来る。のちにペテン師と判明するオズの魔法使いは、自分の家に帰る際に気球を用いて彼の故郷であるオマハを目指すが、ドロシーは気球に乗ることに失敗してしまう。物語の最後で南の魔女がドロシーに魔法をかけて竜巻を起こすことによって、カンザスへ戻ることができるのである。『可能性の水』では、サユリとケイジが偶然訪れたリビング・アースで、一時ケイジが行方不明となるものの、サユリの努力と仲間たちのサポートによって、ケイジを救出し、最後は無事に元の世界へ戻っていく。この二つの作品において二人の主人公が訪れる場所は、この世には存在し得ない異国ないし異界の地である。しかし、ドロシーが冒険するオズの国には人間が存在するのに対して、リビング・アースにはサユリとケイジ以外の人間は存在しない。つまり、リビング・アースは人間の世界の外側に存在する世界であり、人間の世界とは切り離されていると言える。従って人間の世界と外側の世界、つまり異界との間には境界が存在し、サユリとケイジが最初にやってくるリビング・アースの森は人間の世界と異界の境界付近に存在するものと考えられる。

古くから森は人間にとって身近な存在でもあった。森は多様な生命が生まれる場所であり、人間に恵みをもたらす。また深く、入ることが困難な森であればあるほど、その神秘性が増し、畏怖の念を抱くものとして捉えられてきた。日本において神聖な森は「鎮守の森」と崇められ、神々が降り立つ場所として、祭られてきた。例えば、柳田國男の『遠野物語』（1910）では、早池峰山や土淵村の竜ノ森等の多くの森に魑魅魍魎が存在する様子が描かれている。柳田は遠野に伝わる民間伝承を通して、日本人が森を非現実的な世界、すなわち異界や、あの世への通り道として捉えてきたことを伝えている。『可能性の水』のリビング・アースの森も日本人の精神や思想を少なからず受け継いでいると思われる。

また、アメリカよりさらに寒さの厳しいカナダの森の中で、先住民たちは古より、狩りをし、恵みを与える森に感謝し、精霊が住まう場所として神聖化してきた。それは「石のカヌー（“The Stone Canoe”）」や「背むしのマニトウ（“The Humpbacked Mnitou”）」等、先住民に代々伝わる物語にも描かれており、カナダにおける人間と森の深い関係性を読み取ることができる。リビング・アースの森もまた豊かな自然が拡がる広大で神秘的な空間であり、人間と人間ではない生き物が住まう世界である。そして、その森を守るのが日本人にはなじみ深いヤマンバである。

日本におけるヤマンバ話は、多く存在する。従来、山に棲む人を食う恐ろしい鬼女としてのヤマンバから、柔和で子沢山の母性的な一面を持つヤマンバまで、様々なヤマンバ伝説が伝え

られてきた。例えば、柳田の『遠野物語』や『山の人生』（1926）に登場するヤマンバは、山の中の狂女（『山の人生』五「女人の山に入る者多きこと」）や、神隠しにあい山に棲む婆と化した女、あるいは山人（『遠野物語』「寒戸の婆」）、ヤマの神に嫁入りする女（『山の人生』六「山の神に嫁入りするということ」）等を紹介し、特に山隠れする女にヤマンバのルーツを探った。結論として柳田は、女性が入山する習慣は人間の山への信仰心に起因すると捉えている。また小松和彦は、ヤマンバが山神や巫女といった母神信仰に由来すると捉え、ユング派の心理学的な知見も参考にしながら、「究極的には「自然」に近い潜在的な「他者」としての「女性」、男性たちが恐怖する根源的かつ統御しえない力を持つ女性のイメージを表現している」と指摘している（小松 122）。

『可能性の水』のリビング・アースの森で暮らすヤマンバは、優しく、強く、不思議な力を持つものとして描かれている。しかし、サユリとケイジは、リビング・アースで、初めてヤマンバの存在を知ったわけではない。二人はリビング・アースに渡る前、母キミからヤマンバの話を聞き、ヤマンバに関心を持つ。キミの語るヤマンバの物語は次の通りである。

暗い森の中に暮らすヤマンバは偉大なる山の大女であり、火山の火の番人だった。この番人がいなければ、火山は飢え、世界を焼き尽くすという。そのため阿蘇山周辺の村人たちは何十年、何世代にもわたって、毎年秋にはヤマンバを称える祭を行っていた。しかし、次第に住人たちの態度が変化していく。彼らは金属製の奇妙な仕掛けを作った。その仕掛けは悪臭を放ち、狂ったように唸り、ごみを出す。人間の活動によってすっかり阿蘇周辺の環境は変わり、ヤマンバは意気消沈する。その身体は小さくなり、筋肉は枯れ、髪は薄くなっていく。これに我慢できなくなったヤマンバは自分が生まれた森に帰っていく。やがて町中にスモッグが発生し、ごみの島ができ、徐々に劣悪な環境となっていく。番人のいなくなった阿蘇山は遂に噴火する。噴火によって食べるものが無くなってしまった獣たちは飢え、目の前を通るものを何でも食べた。町は衰弱し、僅かな生存者は怒りと悲しみで溢れる。ある時、老女が大声でこれは人間が自ら引き起こした災いであり、昔のように火祭を行えば町は元に戻ると力強く訴える。彼らは昔の住民のやり方に沿って祭を行う。祭では、炎が揺らめき、死人を目覚めさせるために少女が太鼓を叩く。人々は大声で叫び、祈る。すると大地が隆起し、中からうめき声が響き渡る。新しいヤマンバが誕生し、町に再び平和が訪れる（39-42）。

このキミが子どもたちに語った阿蘇山のヤマンバの物語は、ゴトーの母方のルーツである阿蘇周辺の地域に由来すると考えられるが、実際には、阿蘇周辺に火山を守るヤマンバの民話は存在しない。筆者自身がゴトー本人に確認したように、この物語はゴトーの創作である[7)]。また、この阿蘇のヤマンバの森は、人間の住む現実の世界と、非現実的な世界、あるいは人間と人間が全く存在しない世界、あるいは人間が近づくことができない自然の世界との境界付近に存在

するものとして機能する。このヤマンバは、日本に伝統的なヤマンバ像でもあり、人間の支配が及ばない山や火を守り、自然と人間を繋ぐ役目も果している。他方、このヤマンバは恐ろしいというよりは、不思議な力を持つ山の番人、いわば山の神に仕える巫女のような存在とも捉えることができる。ゴトーはこのヤマンバの物語を通して現代社会やそこに内在する問題を示唆しながら、火山や巫女、復活の儀式等のモチーフを用いて、文化そのものが構築される以前の太古の状態も提示していると考えられる。これはドゥルーズとガタリが批判したツリー型の階層構造が存在する前の状態を示しており、彼ら同様に固定化された文化の体系は存在しないとするゴトーの態度の表れとも言える。

一方でこのヤマンバ物語では、人間活動によって森を含む山が怒り、人間に災いをもたらす様子が語られる。波戸岡景太が、二十世紀後半から現代において、日本人が物語の中に描く森について、大江健三郎、宮崎駿らの森を前景化した現代作品の共通点として、「そこ（＝作品）で展開される物語はいずれも、森に囲まれた周縁の閉鎖的共同体が中央からの近代的価値観によって蹂躙され、挙句に窮鼠猫を噛むようにして捨て身の反撃を行うといった筋立てを持つ」（波戸岡 189-190）と述べるように、両者の作品に描かれる森は、詳細な違いがあるにせよ、高度成長期以降、日本の森ないし山が長らく人間によって作り出された村や都市と断絶され、人間によって搾取され、周縁化された場所として描かれている。ゴトーがキミに語らせる阿蘇のヤマンバも現代において、環境問題が深刻化するのに伴い、この人間の存在する中心と自然にあたる周縁の対立構図を浮き彫りにする。ゆえにこのキミの物語には、単に森とヤマンバと人間の関係性が語られているのではなく、読者である子どもたちの環境に対する関心を引き出し、彼らの自然への感受性を高めようとするゴトーの意図がうかがわれる。このようにゴトーの新たな視点が加わったヤマンバは、その後のリビング・アースのヤマンバにおいてさらなる役割が与えられていく。

リビング・アースへやって来た二人の姉弟の目の前に現れる、巨体で、タバコを吸い、酒を飲むヤマンバは（77-78）、キミが語った阿蘇のヤマンバとは異なり、どこに存在するか明確に書かれていない。以前、キミから阿蘇のヤマンバ話を聞いたサユリとケイジが、リビング・アースの森に住むヤマンバに、この場所は日本かと尋ねても、ヤマンバは「私たちはここにいる（We are here）」（78）とだけ述べ、肯定も否定もしない。このようにリビング・アースが日本にあると限定されず「ここ」と表現されることは、この空間が作者ゴトー自身の立ち位置を表しているようにも思われる。日本で生まれ、３歳で家族と共にカナダに移住し、家族から日本人の文化や思想、精神を受け継ぎながら、同時にカナダの主流とされる文化を受容したゴトーは、カナダの主流または支流どちらかに完全に属することはない。むしろゴトーは地中に埋もれる根茎のごとく他の文化と絡み合い、接合する点、すなわち「ここ」に自己が存在することを示

唆しているのである。

また、サユリたちが森で出会ったヤマンバは、母キミが子どもたちに語った火の番人ではなく、水の番人であることがのちにわかる。本作品において「水」はタイトル『可能性の水』にも含まれるように、重要な意味付けがされている。「水」は、生命を与える液体の全てを象徴し、浄化を表すことから（フリース678)、「火」が破壊と再生という両義的な意味を持っているのに対し、生命の源となり、柔軟で流動的なイメージを付与される傾向にある。サユリとケイジが出会ったヤマンバが水の番人であることは、読者となる子どもたちに、このような「水」の持つ肯定的なイメージを持たせるためと言える[8)]。

3　旅の仲間たちの役割

以上のようにサユリは人間の世界から自然の世界へ赴き、異界の入り口付近にある森の守り手でもあるヤマンバと出会い、忽然と姿を消した弟探しの旅に出るのだが、旅の途中で出会う仲間たちにもそれぞれ重要な役割が与えられている。先にも触れたが、サユリが旅で出会う仲間、すなわちキツネのマチガイとカッパのエコーは、『オズの素晴らしい魔法使い』のブリキ、カカシ、ライオンと重ねることができる。『オズの素晴らしい魔法使い』における三人の旅の同行者については様々な解釈がなされているが[9)]、ザイプスは「いかにもアメリカ人にいそうなタイプ」(ザイプス 213) で「孤独な者や社会のはみ出し者」(213) と解釈し、作者であるボームが「彼らがいかに有能であるか」(213) を意図的に描いていると述べている。確かに、脳みそが欲しいカカシも、心が欲しいブリキの木こりも、勇気が欲しいライオンも誰かにその夢を叶えてもらうのではなく、ドロシーとの冒険を通して自分自身の中に自分たちが欲しかったものが元々あったことに気づく。そして最終的には、それぞれエメラルドの街、西の黄色い国、動物たちが住む森の王者となる。

一方で、リビング・アースで相手の言葉をオウム返しするしかできないカッパのエコーは、声を上げて自己表現したいが、結局は社会的強者に逆らうことができず、多数意見や価値観を繰り返して模倣する、すなわち「エコー」するしかない人間を表していると見ることができる。これは『オズの素晴らしい魔法使い』の仲間たちのようにカナダ社会の周縁に置かれた人々を表している。また、人間の手を持つキツネのマチガイは、テクノロジーが益々発展する昨今において、知恵や知識はあるが使い方を誤ればその名前の通り「マチガイ」を犯す危険性を孕んでいる人間への警鐘を表すものとして捉えることもできるだろう。

また『オズの素晴らしい魔法使い』における三人の同行者たちは、実に純粋であり、数々の困難を皆で協力して切り抜け、それぞれ支配者の地位を得ても、ドロシーが家に帰るまで見守り続ける。しかし、『可能性の水』において、カッパのエコーはキツネの大叔父によって魔法

をかけられ、彼に服従するカッパの小隊に、サユリとマチガイを差し出すという裏切り行為を犯す（173-76）。ここには、現代社会は競争や搾取にまみれたものであり、そこで生き残るためには裏切りも厭わないという人間の醜い内面を暗示していると言えるのではないだろうか。

4　タヌキと多文化受容

一方で、本書の最後に置かれた謝辞において、ゴトーがカナダ先住民やニュージーランドのマオリの文化からも執筆の際にヒントを得たと述べている点（318）を検討することも重要である。なぜなら、本作品は日本人の精神や思想を受け継ぐゴトーの日系人としての人種的アイデンティティが描かれている物語であるが、同時にカナダとニュージーランドの先住民文化への深い理解も見られ、それが少なからず作品に影響を及ぼしているととらえることができるからである。

まず、カナダ先住民の文化が反映された場面を考察してみたい。ケイジを探す旅の途中でサユリとエコーが訪れたタヌキの村には「山の血族のアース・ロッジ（the Earth Lodge of the Mountain's Blood Clan）」（144）が建っている。この村には中心的な存在であり、ケイジと同様、行方不明となってしまった「タヌキの偉大なる母（the Great Mother of Tanuki）」も暮らしていた。その住処の描写は以下の通りである。

> Thirty, forty adult tanuki sat round the fire, preparing food, whispering and giggling. Kits tumbled about, hiding behind the pillars that supported the roof. The tanuki children stared with glinting eyes from the dark edges of the great circular abode. Sayuri looked upward. The sod "ceiling" was supported by a hexagon of timbers. The firepit snapped with a clean and bright orange flame. Beams, four meters above their heads, circled around like the spokes of a bicycle wheel and a wisp of smoke snaked up, up. To escape out the small hole in the ceiling. (144-45)

この場面で描かれているタヌキのアース・ロッジについては、日本の伝統的家屋とカナダ先住民の文化、つまり北米の先住民が動物の皮や木や土を用いて作ったドーム形の住居がモデルとなったと述べられている（318-19）。日本では、夏の暑さや湿気、冬の寒さや悪天候から身を守るとために考案された古代の竪穴式住居に近いものと考えられる。これは地面に穴を掘り、茅葺きで屋根を、むしろで土座をそれぞれ作り、中央に炉を置く伝統的な住居である。また、カナダ先住民にとっては、森で獲物を求め、外敵から身を守るために移動しながら暮らすために、ドーム型のテントのような簡易住居は不可欠なものであった。さらに、その住まいは伝統的にシャーマニズムを信仰する先住民が儀式を行い、森に棲む精霊や先祖の霊と交流するための神聖な場所でもあった。以上の場面に登場するタヌキのロッジは日本文化と先住民文化が見

事に融合したもので、ゴトーの先住民文化への深い理解が読み取れる。ゴトーは、２作目の長編小説『カッパ・チャイルド』（*The Kappa Child*, 2001）において、日系移民である語り手と、日系人とカナダ先住民の混血のジェラルド（Gerald）という少年との交流を描いている。ここからも、日本をルーツとするゴトー自身が先住民に親近感や肯定感を持っていることがわかる。そして、先住民の伝統的な住居が日本の民話に頻出するタヌキの住処に書き換えられていることは、カナダでカナダ周縁に置かれた先住民と日系人を結び付け、他者の文化を受容し、ゴトー自身の思想の広がりを示唆することも意味している。

一方でサユリは、以下のように、ある夜タヌキたちがタヌキの母の帰りを懇願する歌を耳にする。

When the myth of life began
Our people shared life with humans,
Stone to earth, fire to water, trees to sky.
But <u>the spiral</u> turning
saw humans break
the pattern
as if they were their own masters.
Instead of magic they wrought death.
They broke the living law ...

Old Baba Tanuki
had retreated from mortal things.
But the people begged:
<u>The spiral</u> has come undone,
The fox has broken the pattern,
and the very stones scream.
Great Mother went to her mountain lair
to hone her lore and magic.
Alas, since then, we've heard no more.（148-49, 斜体ゴトー、下線部岸野）

ここで注目したいのが歌詞の中にある「螺旋（spiral）」である。ゴトーは本作品の謝辞において、「私は特にアオテアロアのマオリ文化にみられる螺旋の持つ意味に感銘を受けた（I have been especially impresses by the significance of the spiral in Maori culture in Aotearoa）」（Goto 318）と述べている。アオテアロア（Aotearoa）とは、マオリの言葉で「白く長い雲が漂う地」という意味であり、ニュージーランドのマオリ語である。さらに、マオリの螺旋はマオリ語の「コル（koru）」に由来し、コルは螺旋状の新芽のシダを意味する。マオリの神話において、母なる大地であるパパ（Papa）が、二人の子どもを救い、その一人がシ

ダの根であったとあるように（Alpers 21）、今でもニュージーランドの森に多く生息するシダ植物は、マオリにとって食料や薬草、建築物の素材として使用される貴重なものであり、マオリ伝統のトゥーを中心とした装飾品に多くみられる模様でもある。そしてこの特徴的な形状を持つ螺旋は波動を共鳴させ、広がっていく様子も表しており、長らくマオリの間では、螺旋の形状で動いている宇宙や生命の誕生や成長、パワーといった意味合いを持つようになったと考えられる。

ゴトーはこのマオリの螺旋を日本人になじみのあるタヌキたちに歌わせることで、マオリと日本の文化を接合する。この歌は、人間や人間が作り出したテクノロジーを彷彿とさせる人間の手を持つキツネの大叔父がその傲慢さゆえに、自然を我が物とし、従来うまく機能していた生命の螺旋が元に戻らなくなってしまったことを嘆いている。このようにゴトーがマオリの文化を日本の文化を象徴するタヌキの歌に加えるのは、カナダの先住民と同様に、旧宗主国であったイギリスによって周縁に追いやられたニュージーランドの先住民マオリの文化へのゴトーの共感と日系人の歴史や文化との親和性を示す。さらに前述したカナダの先住民文化の影響を受けた描写を含めて、このタヌキの歌の場面も、ドゥルーズとガタリが「リゾームは同盟である」（ドゥルーズとガタリ 上巻60）という指摘を彷彿とさせる。ゴトーはカナダとニュージーランドそして日本の文化を結びつけることで、リゾームのような文化的接続を肯定しようとしているのではないだろうか。

その後タヌキの偉大なる母を救出したサユリは、カッパの小隊に捕らわれるが、知恵を使って逃れ、キツネの長老によって魔法をかけられた生き物たちを次々に救う（199）。リビング・アースを我が物としようとするキツネの長老の手は、マチガイと同じように人間の手であった。キツネの長老が仕掛ける様々な罠を潜り抜け、サユリは最終的に、ヤマンバにもらった魔法の水を長老とマチガイにかけることで元のキツネの手に戻す。彼らが持っていた「人間の手」は、人間の卑しさや傲慢さを象徴する。特にキツネの長老の人間の手とその立場は、人間の支配欲や社会的弱者や自然への抑圧と傲慢な態度を表しているとも言える。元に戻ったタヌキの偉大なる母と老キツネはやがて和解する（278）。この二匹の様子に驚くサユリは、自分たち人間の世界では悪事を働いたものは罰せられると述べる（278）。しかし、タヌキの母は、この不思議な動物たちの世界では、悪いことをしても改心すれば許され、自ら罪を犯したことを一生悔いながら生きなければならないと言う（279-80）。これは、先に引用したインタビューにもあるように、善と悪は分断されるものではなく、むしろ表裏一体であり、全ての人間の心の中に存在するものであるというゴトーの思想が反映されていると言える。さらにこれに関連して、森でサユリを執拗に追いかけ回していた厄介者で恐ろしいアオオニは、サユリと魔法の木槌によって一寸法師のように小さくなり、それまで被害にあっていたタヌキたちに笑いものにされ

る。しかし、アオオニがいつもお腹を空かせて森の動物たちを襲うことを知ると、タヌキは食べ物を与えることにする（159-61）。この場面には、一見、恐怖の存在に見えるものも、それに何かしら原因があって周囲のものを傷つけてしまうことや、悪人もなお受け入れていく必要があるというゴトーの思想が垣間見える。

最終的にサユリは無事にケイジを救い出す。一度サユリを裏切ったカッパのエコーは、ずっと探していた実名が「フェン（Fen）」だとわかり喜ぶ。この名前は「沼地」あるいは「湿地」を連想させ、カッパの住処と水の重要性を示唆する。サユリとケイジは再びヤマンバの家を訪れ（299）、その家にある水がめを通って、二人は無事に家へと戻っていく（310）。

おわりに

ある国や地域に伝わる昔話やおとぎ話は、従来、口頭伝承を中心にその内容が極力変わらぬよう、その土地に根差した形で伝えられてきた。また時にそれは類話として周辺に広がっていった。主人公が異界へ赴く物語は、読者を非日常の世界へと誘うために重宝される物語パターンの一つとして彼らを刺激し、現代にも受け継がれている。一方で、それは現代においては、ファンタジー小説やSF小説とも呼ばれるが、いずれも異界には異界のルールや常識が存在し、現実には存在し得ない生き物を登場させることもできる。北米において、このようなおとぎ話の伝統を覆し、異界の物語の人気に火をつけた作品の一つが『オズの素晴らしい魔法使い』と考えられる。この作品は、ザイプスも述べるように、アメリカ人の夢や理想が描かれており、北米における異界ものの児童文学作品の古典として今でも読み継がれている。『可能性の水』は、主人公のサユリが異界を訪れ、現実の世界で身に付けた知識や知恵を活用して、異界での苦難を乗り越えるという点では『オズの素晴らしい魔法使い』の構造パターンに類似していると言えるが、主人公サユリの人種的、文化的背景から登場人物や場所の象徴性、環境を巡る問題、そして異なる文化への肯定感が盛り込まれている点に注目して読むとき、その伝統的な児童文学作品のパターンは転覆する。

『可能性の水』には、ゴトーのルーツとなる日本において馴染み深いヤマンバやキツネとタヌキの化かし合い、カッパ伝説、化け猫、鬼の話など、日本の民話やおとぎ話の意図的な書き換えが随所に見られる。このような日本の民話の語り直しは、従来のゴトー作品にも通底しているものであるが、本作ではとりわけ多い。ゴトーは本作品に新たな視点を加えて民話を書き直すことで、自身の人種的アイデンティティを反映させることに成功していると言える。

さらに、ゴトーは、異界を地下に設定し、ヤマンバやタヌキを通して太古の昔からの世界観を加え、近代化によって抑圧された先住民の文化を結合することで、文化や価値観がある権威によって構築される前の状態の体系を提示しようとする。それによってリビング・アースの中

では、人間と自然が一時的ではあるが共生し、互いに尊重し合っていると言える。一方で善悪も共存し、その二項対立の境界が曖昧となる。この混沌とした世界に赴いたサユリは、悲しみや驚き、喜びを体験して、ついに元の世界へと戻ることができるのである。

以上のように様々な困難を克服し、サユリは強く逞しく成長していく。それをサポートしたのは架空の森の世界「リビング・アース」の動物たちや、人間界と異界の境界の守り神であるヤマンバやタヌキの母である。また、主人公のサユリを支える登場人物の多くが女性であることも重要である。最初にヤマンバの話をする母キミは、いつも子どもたちに優しい長髪の父とは対照的に短髪でいつもズボンをはいているホラー作家という設定であり、リビング・アースのヤマンバはたばこと酒を好む。さらに、悪者のキツネの長老と心優しいタヌキの偉大なる母は、本作品の中で「長老（Patriarch）」と「母（Mother）」と記される。ここには、既存のジェンダー的な規範に対するゴトーの静かな抵抗が込められており、本作品のフェミニズム的観点からの考察も十分に可能であることがわかる。

かつてマーガレット・アトウッドは、『サバイバル――現代カナダ文学入門』（*Survival*, 2004）において、歴史的、文化的にカナダに影響を及ぼしてきたイギリスやアメリカの文学ではなく、カナダ独自の文学の発展が必要であることと、カナダの文学作品がサバイバルというテーマで繋がっていることを論じた。ゴトーが、人種的、文化的な問題を本作品に描くことは、アトウッドの指摘するサバイバルのためのゴトーの文学的戦略ともとれる。『可能性の水』は、日系カナダ人姉弟の架空の世界での冒険を扱った物語であり、ゴトーの人種的アイデンティティ色の強い作品であるが子どもの成長と同時にカナダの多文化社会を構成するエスニック・マイノリティが直面するかもしれない苦難を克服するための力、言い換えれば、カナダの特殊な歴史や文化、価値観や考え方の多様性に気づき、他者を深く理解する力を含む新たなオルタナティヴ・アイデンティティの可能性を提示することを目指した作品であると言えるだろう。

註

1）本作品について、部分的に議論あるいは紹介されることはあるものの、その数は多いとは言えない。しかし、本作品は文学研究だけでなく、英語教育方面からも注目されている。例えば、グリット・オルター（Grit Alter）は、本作品について「異文化の交差と文化的超越の読みを提示し、異文化の交差から文化的超越の学びに繋がることを示す」（offer “iner- and transtcultural readings and illustrate a continuum from inter- to transcultural learning,” 20）と述べ、本作品を英語教育における文学教材という位置づけで考察している。英語学習者にとって、本作品は英語の勉強だけでなく、多文化主義であるカナダの社会的、人種的な問題を垣間見ることができ、結果として異文化理解の能力向上が期待できると考えられる。

2）2017年国立国会図書館の国際子ども図書館と、日本ペンクラブの共催で開催された「シリーズ・

いま、世界の子どもの本は？」（第10回）講演会「いま、カナダの子どもの本は？」で使用された資料を参照。（https://www.kodomo.go.jp/event/ event/pdf/20171118Lecture_handout.pdf）

3）Governor General's Literary Awards の HP を 参 照。（https://ggbooks.ca/past-winners-and-finalists）

4）アメリカ生まれでカナダ在住の児童文学、思春期文学作家。代表作として *Double Spell*（1968）、*Shadow in Hawthorn Bay*（1986）、*The Hollow Tree*（1997）, *Dear Canada* シリーズ *A Season for Miracles: Twelve Tales of Christmas*（*various authors*）（2006）等がある。

5）1975年創設のサカチュワン州のムース・ジョーにある出版社。設立当初は規模が小さい出版社であったが、詩と小説部門を中心に、カナダ政府総督賞を受賞する作品を出版するまでとなる。一方で、児童作品を含む若者向けの作品出版にも力を入れており、『同じボートで』シリーズもその一つの取り組みと考えられる。

6）例えば、竜巻によって東の国にやって来たドロシーは、そこで北の魔女の助言により、何でも願いを叶えるというオズの魔法使いに会い行くが、魔法使いからは西の魔女を倒せば願いが叶うと言われ、西を目指す。一時は西の魔女に捕らえられるものの、最後は見事に西の魔女を倒し、オズの元へと帰るが、実はオズがペテン師だったことが判明する。気球に乗ってオズと元の家へ戻ろうとするが、不運にもドロシーはそれに乗り遅れてしまい、旅は振り出しに戻る。空飛ぶ猿の一団に南の魔女なら力を貸してくれるかもしれないことを聞いたドロシーは南を目指す。南の魔女の力を借りて遂にドロシーはカンザスの家に戻る。このようにドロシーの旅の行き先や方角は常に明確である。

7）筆者とゴトーとのメールのやりとりによるもの。（2019年３月）

8）一方で桧原美恵が『可能性の水』に描かれる水は「再生」と「通過儀礼」のイメージを持つと指摘するように（桧原９）、水は異界であるリビング・アースから二人の子どもが現実の世界に戻るために通らなければならない、つまり大人へと成長するための通過点として必要なものとして捉えることもできる。

9）例えば Henry M Littlefield は、論文“*The Wizard of Oz*: Parable on Populism”の中で、ドロシーは善意をブリキはアメリカの労働者を、カカシは農民を、ライオンは政治家をそれぞれ象徴すると述べている。

引用文献

Alter, Grit. *Inter- and Transcultural Learning in the Context of Canadian Young Adult Fiction*. Lit Verlag, 2015.

Alpers, Anthony. *Maori Myths and Tribal Legends*. Houghton Mifflin, 1964.

Atowood, Margaret. *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*. McClelland & Stewart, 2004.

Bemister, Margaret ed. *Thirty Indian Legends of Canada*. Douglas and McIntyre Ltd, 1973. (Fifth Printing edition, 1992.)

Borm, L. Frank. *The Wizard of Oz*. 1900. Penguin, 2008.

Goto, Hiromi. *Chorus of Mushrooms*. NeWest Press, 1994.

------. *The Water of Possibility*. Coteau Books, 2001.

Littlefield, Henry M. "*The Wizard of Oz*: Parable on Populism" *American Quarterly*, Vol. 16, No. 1, The Johns Hopkins U P. 1964, pp.47-58. (https://www.shsu.edu/his_rtc/2014_ FALL/Wizard_of_Oz_Littlefield.pdf)

Luun, Janet. "Preface," in *The Water of Possibility*. Coteau Books, 2001, pp. i - ii .

Natural Resource Canada. *The State of Canada's Forest: Annual Report 2018*. Library Archives Canada Cataloguing in Publication, 2018. (http:// cfs.nrcan. gc.ca/pubwarehouse/pdfs/39336.pdf)

小松和彦編著『怪異の民俗学５　天狗と山姥』河出書房新社、2000年。

ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史――文明化の芸術から転覆の芸術へ』鈴木晶・木村慧子共訳、新曜社、2001年。

ドゥルーズ、ジル、フェリックス・ガタリ「序――リゾーム」『千のプラトー――資本主義と分裂症上』宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、河出文庫、2010年、15-61。

波戸岡景太「日本の森のあいまいな私」『コンテンツ批評に未来はあるのか』水声社、2011年、188-205。

桧原美恵「ヒロミ・ゴトーの描く水」『エコクリティシズム・レヴュー』第５号、2012年、1-12。

フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ他訳、大修館書店、1984年。

柳田國夫『遠野物語――付・遠野物語拾遺』角川学芸出版（新版）、2004年。

------.『山の人生』角川ソフィア文庫、2013年。

Subverting the Pattern of North American Literature for Children:

Hiromi Goto's *The Water of Possibility*

KISHINO Hidemi

This paper considers how Goto's book for children, *The Water of Possibility* (2001), subverts the patterns and motifs of typical Anglo-American children's literature, and explores its uniqueness and originality, compared with the representative North American children's story, *The Wonderful Wizard of Oz* (1900).

First, *The Wonderful Wizard of Oz* portrays a binary conflict between good and evil, as is often found in conventional Western children's literature, and the deaths of the evil characters Dorothy repeatedly encounters are clearly depicted. In contrast, in *The Water of Possibility,* this type of binary conflict is disrupted, and the deaths of the evil characters are never depicted. These characters are depicted as mending their behavior. This indicates that Goto is deconstructing the typical image of the hero and narrative patterns, namely, the clear delineation of good and evil and the pattern wherein the villain dies at the end.

Also, as is often found in Japanese folktales, Living Earth is a country that cannot exist in the real world. Meanwhile, unlike the Land of Oz, no humans other than Sayuri and Keiji exist on Living Earth. This indicates that Living Earth is a world that extends beyond the human world and is separate from it. From the perspective of the findings of Japanese folklore studies, a border exists between the human world and the exterior world, namely, the human world and an alien world. The "forest" in Living Earth, where Sayuri and Keiji first visit is near the border between the two worlds. Therefore, Yamamba, a character the two children encounter, can be regarded as a guard near the border. The extent to which Goto has inherited and transmitted Japanese concepts into her books is evident.

In addition, one can superimpose the companions that Sayuri encounters, Machigai the fox and Echo the kappa, on the Tin Man, Scarecrow, and Lion from *The Wonderful Wizard of Oz*. However, although the three companions in *The Wonderful Wizard of Oz* are truly pure and obedient to Dorothy, in *The Water of Possibility*, Machigai has human hands and Echo commits the crime of betraying Sayuri and Machigai to the squad of kappas that are obedient to Machigai's Great Uncle Mischief, who is plotting the domination of Living Earth.

The character of the fox, Machigai, with human hands, serves as a warning to humans. Now that technology is abundantly developed, there is wisdom and knowledge; however, if they are misused, violations and danger may occur, as the name "Machigai" (mistake) suggests.

Finally, Goto's transpacific perspective is also considered in this paper. Goto ties together the cultures of Native Canadians and New Zealand Maoris with the dwelling and songs of Tanuki, who symbolizes Japanese culture, thus demonstrating her empathy toward the indigenous cultures of Canada and New Zealand, which were marginalized by the English people, who were their former colonial rulers. Goto presents them in fusion with Japanese culture. As mentioned above, in *The Water of Possibility*, Goto dismantles the patterns and motifs used in conventional children's literature, portrays the racial diversity and multicultural abundance in Canada, and presents ethnic minority identities in an effort to promote children's growth while showcasing Canada's multicultural society. Moreover, *The Water of Possibility* is also notable for Goto's wisdom and creativity, which can help Canadian children overcome the various difficulties they are likely to encounter in the future.